

馬と共通の時を過ごしたい

成穎中学校 二年 谷川 あさひ

去年の夏、北海道をキャンピングカーで巡った。雄大な釧路湿原では、カヌーく
だりで大自然を満喫した。せせらぎの音がない流れに乗って、兩岸の緑にエゾシカ、
キタキツネ、丹頂鶴はじめ様々な動物を見ながら櫓ろをこぐのは至福の一時だった。
九州西方に生まれ育った私には、異国にさえ感じた。

私は幼い時から多くの生き物と暮らしている。犬はもとより、カエル、亀、イモ
リや熱帯魚など様々だ。私が一人っ子でさびしくて飼育しているのではない。兄姉
弟は四人いる。とにかく動物と人に囲まれにぎやかな環境で育った。そんなわけで、
おのずと動物に係わる仕事にあこがれを持った。

釧路湿原を後にし、ばんえい競馬場へ足を運んだ。一トンを超える巨体で大きな
そりを引く雄大な姿に感動した。途中で一息つく大きな馬に「がんばれ、がんばれ」
思わず大声で応援した。勝ち負けなんか関係なかった。ただゴールを目指す、ひた
むきな馬の姿に力を与えたかったのだ。

翌日は、浦河に向かい牧場で草をはおサラブレッドを一日中眺めていた。遠くに
山並みが見える広大な牧場で、群れをつくり走り回る若馬、樹木の陰で母馬の乳を
ねだる仔馬たちは、青く広がる空と共に、まるで絵画のようであった。また、歴史
に名を刻んだ優駿たちは闘争心も消え、穏やかで優しい目をして、第二の人生を楽
しんでいるように見えた。いずれも、私にとって夢のような光景の連続だった。

のぞいたきゆう舎では、餌の準備や掃除に精を出す人々が、活き活きと楽しそう
に馬の世話におわれていた。競走馬を洗い場につなぎ、優しくブラシかけをするき
ゆう務員は、馬に話しかけ、また、馬はきゆう務員を信頼し体を預けていた。その
人馬は、単なるきゆう務員と競走馬の関係を超越し、互いを同化し、まるでひとつ
の生き物のように、私の目には映った。

私は、将来、北海道大学に進み、競走馬に係わる獣医師になることを夢見ている。
旅で目にした光景は強く、北海道で競走馬に係わる仕事に就きたいと思わせた。も
ちろん、九州にも規模は小さいながら、競走馬を育成している牧場はいくつかある。

しかし、どうせやるなら、日本を、世界をリードする一大生産地で自分の力を試したい。

同時に、あの大自然にどっぷりと浸かり、馬の生活リズムに合わせ生活を送りたい。私の歳で、せわしなく流れる都会の波に飲み込まれたくない、無機質な空間で時を過ごしたくないと言え、生意気に思われるかもしれない。しかし、幼い時から動物や多くの兄弟に囲まれ、人間味あふれる環境で育った私は、明らかに都会より馬の生活リズムが体になじむはずだ。

旅先で見かけた、きゅう務員の表情は例外なく優しく穏やかであった。そして、そのきゅう務員の愛情を一身に集めた競走馬の目は、無機質な人間社会から遠く距離を置き、馬と人の信頼関係から構築された別世界を感じた。もちろん、そのあとの現実には厳しい。育成された仔馬たちは、この北海道を発つときは、闘争心を持った競走馬となり、一部の優駿を除き、そのまま生涯を閉じる。それ故、誕生から二年余りの時を大切に送らせたいたいとの思いがあるのだろう。

自分の将来について、より現実的な青写真を描き始めた中学一年の夏に、訪れた日高地方は、私に大きな刺激と夢を与えてくれた。そして、動物に係わる仕事の糸口を見つける旅となった。また、そこで目にした、馬に情熱と愛情をそそぐ人々は、私には、ひととき輝いて見えた。ぜひ、その一員として、競走馬生産に関わりたい。大自然に囲まれた北海道で、競走馬と時間を共有する生活を実現するため、学習に部活動に、今できることに全力で取り組んでいきたい。